

バードの旅

tarousan

道は遠かった。いったい、目的の研究所に着くためには、あとどれほどの距離を走破せねばならないのか。

「ああーあ、俺たちも飛べたらなあ。おまえだけだったら、たちまち到着してしまうだろうにな。なんで、俺たちと一緒に行くように決めただろう、あのロボットの奴」

ブラックが、バードの翼を収納したボックスを見つめている。

「うん、うーむ」

たしかに、必要量の果物さえあれば、驚くほど早く着くかもしれない。しかし、まだバードは、自分の体力がどれぐらいのものか確かめてあるわけではない。はたして、日いっぱい飛行するという運動をして、何日もつものだろうか。

それにだ。問題は自分の体力だけではあるまい。空中にだって、なにか予期しない障害があるかもしれない。飛行するものにも、なにかバイオの産物があると思わなくてはなるまい。一人では、いつ襲ってくるかもわからない敵に対処できないだろう。焦って先を急ぎ、くたくたになっていけばなお危険だ。肉食生物の餌食になってしまう。

「さあ、行ってもいいんだよ。足手まといにされるのは、御免だよ。あたいは、自分の力で、たどり着いてみせるからさ」

ユミは怒って歩を速めた。長いコンパスで二人からたちまち離れて行ってしまった。

そうだ。バードは気付いた。研究所の方向を示すコンパスは、ユミが持っているのだ。なぜかロボットは、ユミだけにその腕時計型の方向指示器を与えたのだ。研究所からの信号で、いつも指示器の針は一定方向を向いているという。信号の来る方向を指しているのだ。

ユミはそれを二人の男に見せ、これを与えられたということは、自分がリーダーとして認められたのだと自慢した。方向がわからなければ、一人で飛んでいくわけにもゆかない。

「怒っちゃったぞ。おまえが余計なことを言うからだ」

ブラックが返事をしないので振り返ると、彼は空を見上げていた。口を開けたまま。

バードが相手の視線を追うと、中空に、巨大なまるで雲のような物体が降りてきていた。

「なんだ、あれは！ 生きているのか？」

「わからん。バードおまえも、あんなもの見たことはないんだな」

グレーの、半透明かと思われる物体である。

「みなさん、ごきげんよう。旅ですか？ お役に立ちましょうか。あっという間に、すごく距離を稼げますよ」

二人は度胆を抜かれた。巨大な、まるで丸い雲のような代物が、明確な言葉をしゃべったのだ。

高度が、ずっと低くなってきている。一〇メートル足らずか。バードは、その物体から長い紐のようなものが、何本か垂れ下っているのに気付いた。風に吹かれても、この程度の高さに来るとたいしてなびいていない。ある程度の質量があるのだ。

ユミも、立ち止まってこっちを見ている。

バードはどうしたものか迷ったが、ブラックは気軽に応じた。

「なんだい、おまえさんは。やはり生物なのかい」

それとも、誰かがこの空中に浮かぶ奇妙な乗り物の中にいる、とでもいうのだろうか。「ハハ

ハハ。これでも、この惑星の一生物なのさ。誰かが言っていたな、[空中クラゲ]と。わしは、そう呼ばれるのを別に嫌とは思わん。この惑星の空を、思うままに飛び回っている存在さ」
怪物は、長い話を始めた。自身のシステムに関することである。どうも、たいへんな饒舌

家らしい。

やはり、昔生物学者によって作り出され、この世界に放たれた生物だった。まったく、思いもかけないものを作り出したものである。彼らの異常な創造力—想像力は、果てがなかったのだ。

「早い話が、植物的なのさ。太陽のある限り生きてゆけるんだ。風に吹かれるまま、天のお恵みで光合成を行い、エネルギーを作り出す。まったくの自給自足で、暮らしてゆけるんだよ」

クラゲの上部の方から、なにか長いものが伸びてきて、彼らの上を動いた。

「目だ。先端が目になっている」

いつの間にかそばへ来ていたユミが、言った。なにしろ二人よりはるか高いところに顔があるので、いち早く発見したのだ。

「そうだよ。こんなに大きな体なので、目も移動させないと良く見えないわけだ。どうする？

乗ってくかい。風の方角も、いいようだ」

三人は、顔を見合わせた。そして、腰を低くした。相談を始めたのだ。

「なにか、問題はないか。うっかりして、とんでもないことになったらどうする。あいつは、信用できるだろうか」

バードは声をひそめて言った。上を見上げる。奴の聴力は、どれほどだろうか。相談を聞かれずに済むだろうか。

「大丈夫じゃないか。気の良さそうな奴じゃないか。俺は乗せてもらうぞ。すごく距離を稼げる。テクテク歩くのと比べたら、どうだ。それに危険なものだって、飛んでゆくんだから、出遭うこともない」

「そうだよ。いくらあたいのあんよでも、あつという間に飛んでゆくのはかなわない。頼もうよ」

バードはしかし、用心深い。

「だが、あいつはどうしてそんなに親切にしてくれるんだ？ なんの見返りもなく、我々を運んでくれるのか。なぜ？」

ブラックが立ち上がった。

「どうして、おまえはそんなに疑り深い。好意というものを知らないのか？ あの、いや人じゃなくても、とにかく。体も大きい心も大きく、困っている者を気軽に助けてくれるんじゃないか」

上へ向かって、

「すみません。お世話になります。で、なにか、お礼ができるでしょうか？ なにか我々にできることが……」

「ハハハ、そんなこと気にせんでいい。わしは、そんなつもりで声をかけたんじゃない」

「でも……」

ブラックが殊勝な顔をする。

「そうさなあ。じゃあ、あんた方の気が済まんというなら……そうだ、下のものでも貰おうか。大でも小でも、けっこう」

「え！」

三人とも、驚いた。

「なんて奴だ。糞・小便をくれってか」

バードが小声で呟いた。

「こうなんだよ。わしは、植物的だと言っただろう。だから普段は、光合成に必要な水と空気中の二酸化炭素を得ていればいいんだ。だがたまには、他の物質も新しいのを取り入れたいんだよ。リサイクルしていても、なんの問題もないんだが……そうそう、リフレッシュしたいんだな。ほとんど、効果は精神的なものなんだろうが」

他の、クラゲの体を構成する物質は、リサイクルすればいいのだという。クラゲ自身の体

内でだ。ただ多少なりとも外から取り入れれば、リフレッシュして気分が爽快になるのだという。

バードはしかし、考えた。もしも、この怪物がなにか悪巧みをしていたらどうする。空中へ上げられてしまっただけからでは、それがわかってもし手の打ちようがないではないか。

それはバードだけなら、翼を使ってあっという間に逃げ出すことができる。しかしこの二人はどうにもならず、怪物に降ろしてもらうのを当てにするしかないのだ。

たちまち巨体が降りてきた。

が、下面が二、三メートルの高さで、止まった。

「わしは、地表までは降りられないんだ。尾を伝って登ってきてくれ。強度は、十分あるはずだ」

クラゲの尾は、五本あった。垂れ下がっていた長い物は、尾であったのだ。中の一本はどうしたとか、他のものより一メートルほど短い。端が、ちぎれたようになっている。なにか凶暴な動物にでも咬み取られたのか。

他の四本は正常らしく、細くなった先端までは五メートルほどある。低く降りてきた今は、三メートル余りが地表に伸びている。

「バード、行くぞ。いいな」

「しかし……」

「なにをぐずぐずしているんだ。人の好意がわからないのか」

ブラックは怒って、クラゲの尾へ手をかけた。

「乗ろうよ。なにも問題はないんだろう？」

ユミも、クラゲへ近付いた。バードは不安だった。取り返しがつかなくなるかもしれない。一度クラゲに身を預けたら、もう相手の思うままなのだ。

しかし、二人を説得できる理由を思いつけない。行くしかなかった。二人だけでは、もっと困るはずだ。バードという、いざとなれば飛行可能な者がいれば、なんらかの対策がたてられるかもしれない。まあ、絶対このクラゲが悪者ときまったわけでもない。

バードは巨体へ近付いた。すでに二人は、巨体に隠れて下からでは見えなくなっている。

怪物の体は、中心の部分と、それを取り巻く巨大なドーナツ形のものから構成されている。尾は、両者の間から出ているのだ。バードは尾を掴み、ドーナツ部へ足をかけ登り始めた。

背側は、翼のボックスがドーナツ部へすれすれという、狭い空間である。両わきは、中心部とドーナツ部が繋がっている。つまり、この尾が下がっているところだけ、中心部とドーナツ部が接合していないのである。

二人はとうに、ドーナツの上面部へ上がっていた。下からは気付かなかったが、上面部はうすい緑色をしている。バードは槍をユミに受け取ってもらい、上へ出た。

三人が立っているのは、ドーナツ部の上だ。やはり、ドーナツ部と中心部は繋がっている。尾の通っている穴部は除いてだが。

中心部は、ドーナツ部より二メートルほど高くつき出している。頂上はドーム状だ。中心部の上の方に、目の管の基部がある。二本の白っぽい蛇のようなその管は、休みなく動いて彼らをながめ回している。

二つの、目の管の基部は、三メートルほど離れているが、そのちょうど中間になにか動くものがある。それが口か。

「今あんたたちの立っているところが、浮力をつくり出す〔水素のう〕なのさ。別に危険はないよ。生体的方法で、安定な状態が保たれている。二百年も生きているんだよ、これで。心配無用だ。そうそう、例のご馳走を入れるところ、右だ右」

三人はドーナツ部を移動した。中心部と接合する付近は、四、五〇センチの幅で、一段低くなっている。体中ぐるりとそうであるらしい。問題の穴は、その低い部分にあるのだ。

彼らが昇るとき使った尾は、真後ろと左後ろのものだが、その穴は、右側の、前と後ろの尾の間にあった。つまり、クラゲの体のほぼ右の真横に位置している。

「どちらかの尾を引っ張ってきて掴まれば、飛行中でも安心して用が足せるはずだ」

三人が覗き込むと、そのくぼんでいた部分の中心がほぼ円周方向に裂け、赤みの感じられる内部が見えた。クラゲは、幾度かそれを開閉して見せた。二、三0センチの裂目だ。「では、そろそろ出発するとするか。尾に掴まっていけば間違いないが、その低いところなら手放しでも大丈夫」

しかし立つときには、必ず尾を握っていると言った。

どんどん上がってゆく。ドーナツ部が固く張ってきたようだ。中心部から発生した水素が送られて来るのだろう。それで浮力が増してきたのだ。

高く上がるとともに、巨体が風の方へ動き出した。三人は腰を下ろして、一本ずつ尾を握り締めていた。まだ目が眩むようで、下界の眺めを楽しむ余裕はなかった。

もっとも、話し好きのクラゲが相手では、高所への不安もよほどうすれてくる。

「わしの体の上面には、光のエネルギーを吸収することのできる葉緑素が、莫大に含まれているんだ。これによって生み出されるエネルギーで、空気中の二酸化炭素と水から炭水化物をつくる。ようするに、植物的なんだよ」

「水素も、つくれるの？」

ブラックがすっかりうち解けている。クラゲの目がブラックを正面から捕らえようと、その長い蛇のような、視神経の入った管が休みなく動いている。

「うん。水を分解するからね。その中の水素を利用するんだよ。いわば副産物で、わしは浮いていられるのさ」

「おじいさんは、学があるんだねえ。やっぱり、学校があるの？」

「馬鹿言っちゃいけないよ。二百年も生きていれば、いろいろ覚えるさ」

言葉もなにもかも、人間との付き合いから覚えたのだという。クラゲを乗り物代わりにした人間たちから。

「さっきの、下のもののことだけどね。それが、わしにとって価値のあるものだと知ったのも、思いがけずにだった」

クラゲは物心ついたときには、今のように空中に浮かんで陽を浴び、風のままに漂っていたという。

それがいつからか、地上を歩く者たちに興味をもち、近付いてゆくようになった。初めは、彼らと一緒に旅をした。気紛れに、付いて飛んだだけだった。

あるとき、歩き疲れた者を、ほとんど戯れに自分の体へ乗せた。その頃はよほど成長していて、人ひとり乗せる浮力をそなえていたのである。さらに味をしめ、旅人を乗せるようになった。まったくの人懐っこさから、そうしていたのである。

やがて、事件が起こった。空中にいるとき、人間が便意を催した。小の方である。で、クラゲから降りてまた乗せてもらうのも面倒だと、空中のクラゲの上から用を足した。そのとき、誤って尿がクラゲの〔吸収口〕へ入ってしまった。

「それがね、思いがけず美味かったんだよ。この世には、こんなにすばらしいものがあるんだ、と感動した」

以後クラゲは、人間を見つけてはタクシー代わりを引きうけ、大、小便を礼として貰うよう

になったという。

　　バードは、怪しげな話だと思った。なにか不合理な点がありはしないか。つじつまは確かに合っているだろうか。

　　「素晴らしい発見だったんだね。あんたにとっても、乗っけてもらえる我々にとっても。その日は、記念すべきだ」

　　ブラックは、完全に意気投合している。ユミは聞耳は立てているのだろうが、遠くへ目を向け知らぬ顔を装っている。

　　「まさに味気ない水を飲むことしか知らなかったおじいさんに、美味しい食物が出現したんだ」

水は、雨という形で容易く手に入るだろう。が、さてよ、とバードは思った。クラゲは、植物的だと言った。水しかいらぬのか？ バードにはたいして知識はないが。町にあった農園の水耕植物だって、バードの管理していた公園の果樹だって、ちゃんと肥料というものをやっていた。

なるほど、町の外の木や草には、わざわざ肥料をやる者はいない。しかし、そうした野性の植物には、死んだ動物の体や、あるいは植物の仲間の枯れたものが腐り、やがて肥料となる、と聞いたことがある。

たしかに、植物は日光のエネルギーにより、水と空気中のなにかから物質をつくり出すということだが、それらだけでは足りないはずだ。

そうだ、[食虫植物]という変わったものがあった。あれは、虫を食べ自分の養分にするのだそう。普通の植物と違って、根が貧弱だからだ。

では、このクラゲはなんだ。おかしいぞ。こいつには、なにかを吸収するための根はない。こいつは、食虫植物か？

それは、こいつが絶対嘘をついているとは言えない。植物とまったく同じではなくともいいのかもしれない。しかし、もしこいつが大嘘つきだったら、どうなる。どんな魂胆があるんだ。食虫植物的、だとしたら……

いや、疑っていることを気付かれてはならない。うまく騙したと思っていれば、なにかぼろを出すかもしれない。

「おじいさんは、本当に平和主義者なんだね。自分が生きるために、植物さえ犠牲にしなくていいんだ」

とバードが言って目を向けると、ユミはそっぽを向いた。どうも彼女は、鳥や小動物の生食いが好みらしいのだ。二人の男は、菜食主義者の類だ。

本当にこのクラゲ、空中を飛ぶ鳥や虫なども捕らえないのだろうか。なにかを体へ取り入れる[吸収口]は、上を向いている。飛行生物を追いかけて、飲み込むというわけにはいかないだろう。横倒しの状態で飛べるのなら別だが。

突然、

「なにするんだよ！ こいつ」

二人が思わず振り向くと、ユミは今度は彼らへ怒りの目を向けた。素早く身なりを整える。さっそく、ユミは用を足していたのだ。彼女が、トイレ(吸収口)に最も近いところにいたのだった。

「まあ、まあ、そう怒らずに。美味しいお嬢ちゃんのおしっこ、一滴でも無駄にしたいくなくて。ハハハ」

「へんたい」

ユミはぶんぶんして、元の位置に座った。どうもクラゲの奴が、彼女の尻をペロリと一つやったらしい。舌のようなものもあるのか。二人の男は、吹き出すのをこらえた。

「へえーっ、優良人にねえ。いいじゃないか。わしなんか人類でもないから、変わりようがないよ。もっとも、この生活が嫌いなわけでもない。あんたらのような人たちにも会えるしね。なにより、普通の生きもののように食うための苦勞をしないから幸せだよ」

「本当だ。おじいさんこそ、理想的生物、究極の生物だね。人間なんて、不完全すぎる」 と言

ったもののバードは、なにか気になった。本当にこのクラゲ、なんの欲もないのだろうか。

「ぼくもこれで」

とブラックが口を出す。自分も、相当に合理的な体だ。なにしろ、ほとんどの植物を食物とすることができる。それもちゃんと栄養としてだ、と言う。

「だから、よほどの悪条件のところ、砂漠のような不毛地帯じゃない限り生きてゆけるんだ。おじいさんの次ぐらいに、僕は合理的だろう」

ユミが口をとがらす。

「なんだい。そんなにご自慢の体なら、なにも世界の果てまでも行って、つまらない体に変えちまうことはないじゃないか」

「それは、しかし、やはり……」

ブラックは言葉に詰まった。

「しかしね、お嬢ちゃん。人間て奴は、そんなに簡単じゃないんだよ。たとえばね、あんたみたいな別嬪さんと仲良くなりたい、とこの黒い人が思うだろう。するとね、はなはだ合理的な体であっても、やはり不都合になってくるのさ」

「へえ。だって、あたいはこのブラックの体好きだよ。この固いのを抱き締められたら、ビリビリしちゃうよ」

とユミは、ふざけてブラックに抱きつく。ブラックは照れる。

「そうだったね。たしかに、この黒い人は敵無しだろう。その鎧に包まれていたのでは、どんな怪物だって歯が立つまい。食おうにも食べまい」

「うん。僕がどうにでもしてみろ、と仁王立ちになれば、どんな奴だって困るのさ。しかし、もう飽きたよ。敵のいないことなんて、たいしたことじゃない」

ブラックがすっかり調子にのっている。バードは面白くなかった。

「おい、そろそろ」

とバードが、ブラックをつついた。

「うん？ おお、そうだな……では」

ブラックはユミと位置を替わってもらい、さらに件の場所へ移動する。

「世話になったから、せいぜい奮発しておこう」

奮発しなくても、ブラックの排泄物は十分な量があるはずである。

たちまち、クラゲが喜ぶ。

「ウヒョーツ、すばらしい。こんなのは初めてだ。味も量も最高だ」

二人は顔を見合わせた。なににでも、喜ぶ者はいるのである。

「さっぱりした。その上、こんなに喜んでもらえるんだからな。初めてだ、喜ばれるなんて。嫌がられてばかりだったのに。いいことをした後は、気持ちがいいな」

「アホか」

ユミがそっぽを向く。

「もう行こうよ。あんまり楽をしちゃうと、あたいのこのあんよが、弱っちゃう」

「そうだな。なんだかすっきりし過ぎて、腹が減ってきた。では、そろそろお暇を……」

「うん？ まだいいじゃないか。もう少し」

「でも、もうお礼もできませんし。なあ」

バードもうなづく。バードには便意など湧きそうにない。もしものときにそなえて、体が戦闘態勢に入っているのだ。

「あんたは、いいのかね？」

ブラックがバードを見て代わりに答えた。

「こいつは、食いが細いので、たいしてお役にはたてません」

バードは面白くなかった。小食で、働きも悪いと思われるじゃないか。早く行こう。

「いつかは、お別れしなければなりませんから……」

「……」

「あたいも腹ぺこだ！」

「降りなくてもいいと言ってるんだ」

がらりと口調が変わった。やっぱり、とバードは身を引き締めた。

「どうしたの？ おじいさん。僕たち、なにか失礼なことをしましたか？」

ブラックの馬鹿が。呑気な奴だ。

「いや、おまえたちは、わしにおおいに気に入られたんだ。光栄に思え」

「はい、ですが、そろそろお暇を」

「おまえが一番気に入った。おまえから頂こうか。それとも、楽しみは後に残すか。さて大漁で迷うわい」

「な、なにを言うんだ。あんたは……」

遅い奴だ、とバードは嫌になった。

バードは叫んだ。

「で、では嘘だったんだな。おまえは動物を食べるんだな。〔食虫植物〕だ！」

目の管が、おどけたように揺れ動く。

「ハハハハ、うまいことを言う。なるほど、食虫植物か、その通り。わしは、馬鹿な人間を騙して食うのが専門だ。植物のように光合成もたしかにするがな、食い物を食わんでは生きてゆけん。この巨体を維持するには、大量の食い物が必要だ」

「これを見ろ！」

三人は右へ寄った。度胆を抜かれた。二、三〇センチだった吸収口がバククリ開き、二メートルを越える裂目になっている。

クラゲは、それをいく度か開閉して見せた。なるほど、ユミをペロリとやったと思われる真っ赤な舌も、出入りしている。その上で用を足した二人は、身震いした。危なかった。

「だから、なんだい！」

ユミだ。ナギナタを構えている。その目の管でも、切り離そうという気か。しかし、そうして大丈夫なのだろうか。クラゲには、どんなカードがあるんだ。

「変な奴だと思っていたんだよ。やっぱりそうだった。あたいに会ったのが百年目だ。さっさと降ろさないと、ビラビラに切り裂いてやるよ」

「アマめ。やれるもんなら、やってみろ。わしが傷つけば、おまえたちはまっ逆さまに地上へ落ちて、ぐしゃぐしゃになるんだ」

ユミはすごい顔で、怒りを堪えている。離していた尾を左に握り、右手だけでナギナタを振り上げている。

男二人も、改めて尾を握りなおした。彼らが尾をはなした際にクラゲが急な動きをすれば、どうしようもなく放り出されていたのだ。

「わしに食われてしまうんだ、がきども。そして貴重な物質としてこの偉大な体を構成し、永遠にこの惑星を飛び回るんだ。幸運を喜べ」

クラゲの奴すっかり調子に乗っている、とバードは腹が立った。バードとしては、唯一人現在の状況が恐ろしくないわけだ。いざとなれば空中へ投げ出されてからだって、羽ばたきを始め、無事に地上へ降りる自信はある。

しかし、他の一人だけならともかく、二人を一度に助けて着陸することはできない。三人分の体重を翼で支えるのは無理だ。

それでもとにかく、バードの翼というものは、三人の旅人にとって最大の頼りであるはずだ。

急にブラックが、ニヤツとした。

「バード、おまえなにか言ってやれ。我々がどんな力を持っているか。おまえの一」

そこでかろうじて、バードはブラックの口を塞ぐことができた。ユミが左端へ移った。「なにを言いやがる。おまえって奴は、なんてほら吹きなんだ。偉大な〔空の旅人〕の前で、無力な俺

たちがなんだと言うんだ。黙れ」

バードはブラックがまたなにか言おうとするのを、必死で止めた。彼らの切札であるバードの翼のことを、断じて知られてはならない。

「ほう。おまえは、できそこないの礼儀知らずで、どうしようもない奴と思っていたが、案外ものがわかるらしいな。ふん、おまえ一人ぐらいなら、命を助けてやらんわけでもない」

「ちえっ、こいつ。自分だけ助かろうとして。きたない。いやらしい。こんな化物に、おべんちやら言って」

バードはあわてて、ユミに言った。片目をつぶって。

「待ってくれ。俺はそんな気はない。実はこうなんです、[空の巨人]」

バードはクラゲの目へ向き直って、話し始めた。

自分はごらんの通り、取るに足りない役たたずである。それが旅に出て、他の二人になにかにつけて迷惑をかけた。心苦しく思っていた。また、つくづく自分という者に愛想がついていた。

それで今回のでき事だ。自分らの命は、完全にあなた次第である。自分は今覚悟ができた。思えば惨めな人生であった。が、今ここで助かったとしても、たいして差はあるまい。みすぼらしい人生が残っているだけである。そこで、[巨人]の広い心におすがりしたい。どうか、自分一人を食物にして、この二人の命を助けてほしい、と言った。

「お慈悲です。どうかこのみすぼらしい者に、一世一代のことをさせてやって下さい。最後の最後にやって来た、一回だけのチャンスなのです。哀れな者にお情けをかけてやって下さい」

「うーん。なかなか見上げたものだが、しかし、わしが食いたいのはその黒い奴なんだ。それは、珍味だろう」

ブラックが怒る。バードがあわてて、ブラックに近寄った。

「ふざけるんじゃねえ。どうして俺が食えるものか。おまえみたいなじじいに、この固い体が消化できるもんか」

おまえのきたない消化管なんか、素通りして出してみせてやる、と言った。

「ハハハ、見せてもらおうじゃないか。わしの消化システムは最高だ。強力な消化液で、金属だつて溶かせるんだ。おまえなんか、どうってことない」

ブラックは不安になってきた。バードの手を握り締めている。

「俺も飛べたらなあ。おまえ、うっ」

バードはなんとか相手の口を塞いだ。

「どうしても許していただけませんか。ブラックがほしいと言うんですね。しかし」

「しかし？」

目が近付いて来た。

「はい。こういう言い方はしたくないんですが、ブラックに限ってあなたの毒牙を逃れることができるんです」

なにか言おうとするブラックの足を、踏み付けた。

「つまり、彼の体が頑丈だからです。それは、あなたに飲み込まれてしまえばだめでしょうが、もし、彼がここらとび降りたらどうなるとおもいます？」

ブラックはまたなにか言いそうになり、バードに足を踏まれた。

「潰れるだろう。いくら甲羅におおわれていたって、潰れて中身をまき散らすはずだ」

ブラックは吐きそうな顔だ。

「ところがです。こいつはなんとか助かるはずなんです。それほどの強度をもっています」

それは、腕や脚の一、二本は折るだろう。腰を打って、しばらくは動けなくなるかもしれない。しかし、生命まで失う可能性ははなはだ低い、とバードは言った。

どうだ、ざまあみろ、うまく言ってやったとバードは内心ニヤリとした。

しかし、

「ハハハ、やってもらおうじゃないか。じっくり拝見しよう。その黒い奴のダイビング。みごと着地できたら、御喝采だ」

ブラックは恐れをなして、バードのベストを引っ張る。

バードはそれを振り払いながら、精神を集中させようとした。なぜクラゲは、ブラックが飛び降りてしまって困らないのか。ブラックにひどく執心なのは、はっきりしている。ブラックを食うことを諦めたからではない。なぜ？

「さあ、どうする。やらないのか。そうしていても、結局空腹で衰弱して、わしの腹の中へ転がり込んでくることになるのだぞ。こっちは、ただ待つだけでいいんだ」

獲物たちは、沈黙してしまった。

「助けてやるとしても、それは一人だけだ。おまえたちのために、水素を無駄に使ったからな。そのカロリー一分も、補わねばならん」

前に水素は副産物と言ったが、実は水素を分離して使うことは、その分光合成によって造られる栄養を減らすことになるのだという。彼らを乗せるために、溜めていた水素を放出して降りて来、今度は上昇するために新しい水素を発生させ、[水素のう]に送り込まねばならなかったのだ。

「まだ、おまえたちのために使う必要もあるしな」

とクラゲは謎めいたことを言った。

まだ？ バードは考えた。クラゲは、どんなことに水素を使うのか。

上昇するときは、ドーナツ部へ送り込めばいい。では下降するときは一水素を放出する。そう、放出するから失われるんだ。放出するから……

クラゲは、どうやって飛ぶ？ 風？

「餓死するのは辛いぞ。自信があるんなら、やってみろ。よし、少し高度を下げてやろう。どうだ、このわしの心の大きさは。獲物に対してさえ、情けをかけてやるんだからな。真に勇気のある者は、生き残らせてやる」

おかしい、とバードは感じた。なぜ高度を下げるんだ。そうだ。バードがブラックの体について語ったとき、ただちに高度を上げるべきだったはずだ。逆じゃないか。心が大きい？ 誰が信じるものか。このおしゃべりクラゲ。こいつは舌先三寸で人を騙し、餌食にしてきたのだ。

……クラゲは、ブラックにここからとび降りさせたい、のだ。どうして？

ブラックが空中にとび出す。すると、クラゲはどうするか……

バードは、わかった、と思った。それは絶対の自信はない。しかし、今思いついたことにしか、手は打てないのだ。十分考えている間はない。で、どうする……

「ユミ、ちょっと、頼みがある」

そう言ってから、バードはクラゲへ向き直った。

「実は俺は、納得いただけだと思いますが、まだ女の唇というものさえ知りません」

命を失うことが避けられないのなら、せめてその前に接吻というものを体験したいのだ、と言った。それを許してほしいと。

「ワッハッハッハ。なるほど、さもありなん。いいだろう。わしが許す。女、こいつの願いを叶えてれ。ワッハッハ」

ユミ、とバードがせまるのを、

「やだよ、情けない！ 恥知らず」

バードは片目をつぶり小声で、さらに首を伸ばして彼から離れようとするユミに、言った。

「違う。計略があるんだ。聞け……」

ユミは一瞬はっとし、すぐ抵抗を形だけのものにした。バードは背伸びして、ユミの顔へ近付こうという素振りを見せる。

「やめろ、やめろ！ みつともない。バード！」

ブラックは落ちるのを恐れてそばへ近付かないものの、二人の様子に気が気でない。

「ワッハッハ。人間の極限状態の一つか。うーむ、おおいに参考になる。これでまた、わしの思

考力が進展するだろう。獲物の本性を十分に把握することが、より良い狩猟に繋がるのだ」

「勝手に、しやがれ！」

ユミだ。ユミがバードを押しつけ、空中へ身を躍らせたのだった。

「馬鹿な！」-クラゲ

「ゆみー！」-ブラック

だが、たちまちブラック自身が恐慌をきたした。クラゲの巨体が反転して、急降下を始めたのだ。

バードは両手でクラゲの尾を握り、すでに裸足になっていた両足で、ブラックの片方の足首を捕らえていた。そのために、ブラックは空中へ放り出されずにすんだのだった。

がその状態も数瞬の間で、バードは尾を放し、翼のスイッチを入れた。ブラックの恐慌状態など意に介さず、たちまち羽ばたきへ入魂する。

「うわあー、死ぬー」

ブラックは体が重い上に無闇に暴れるので、足の握力が危ぶまれる。まったく厄介者だ。

幸い時間はかからない。ギャフンとブラックが顔から地面へ着くのを確かめるより早く、バードは上昇を開始した。次はユミだ。

早く空中に躍りだしたユミが、まだ落ちて来ないのにはわけがある。いた。巨体が空中に停止している。

ほっとした。ユミだ。彼女は無事にいてくれた。こんなときには、気丈夫ありがたい。ユミは今、クラゲの吸収口の上に、引っ掛かっているのだ。巨大に開きうごめき、獲物を飲み込もうとする[地獄の門]に落ち込まないのは、なぜか。彼女が、その大口に渡したナギナタに、かろうじて掴まって頑張っているからである。

ユミはバードのアイデア通り、いやそれも上出来に実行してくれたのだ。クラゲが、落ちてゆくユミを超越し、下で大口を開けて待つ。しかしユミは、倒立の形でナギナタを両手で横に持ち、クラゲの上へ落ちたのだ。

が、急がねばならない。今はユミも疲れ、やっとナギナタにかじりついている状態なのだ。バードはパワーをしばり出し、ユミへ近付く。

「ユミ、足を伸ばせ」

バードはユミの上へ位置した。

「や、こいつ。いつの間に。わしを騙したな」

怪物がわめく。

バードは、このままでは危ないと思った。うっかりすると、二人いっしょに飲み込まれる。こいつは水素をジェットのように噴射し、移動することも、体を回転させることもできるのだ。

「バード、行くよ！」

「おう！」

バードはユミの両足を掴み、全力で羽ばたいた。

「ギャーツ」

巨体があっという間に、空気を吹き出す風船のように彼方へ飛んでいった。

ユミである。彼女が離れぎわに、渾身の一刀をクラゲに浴びせたのだ。たいした女である。

二人はくたくただったが、どうにか軟着陸に成功した。

ところが、

「バード、ひどい奴だな、おまえは。死ぬかと思ったぞ」

ブラックだ。いい気なものである。まだ顔を土だらけにして、座り込んでいる。

バードは、口を利くのも億劫だ。へたり込んで、あたりを見回す。果物だ。グリコンの樹がある。

どれ、とふらつきながらも、立ち上がる。あれを食わねば、元気は出ない。

樹へ向かって歩きだすと、

「待って、あたいが取ってやるよ」

ユミが後を追って来た。

「うまくいったね。あんたの考えた通りだった。あのピンチに、よく頭をはたらかせたよ」

あんたは頼りになる、とユミは珍しく素直だった。そしてピョンピョンと跳びながら、樹に近付く。

すばらしいジャンプをして、ナギナタで果実を一房切り落とした。うまく受けた。

「はい、ご褒美、ふふ」

「すまん」

バードが疲れた顔に喜色をのぼらせる。かぶりつく。うまい。これで、なにもかも、苦勞が消える。

クラゲの食事法が問題だったのだ。バードは、それを見事探り当てた。クラゲは、しきりにブラックにとび降りさせたがった。そしてクラゲには、獲物を吸収口へ運ぶための手は存在しなかった。さらに、怪物は水素を利用できた。

これらのことから、バードは思いついた。まずクラゲがするのは、なんとかして、空中の自分から獲物を落とすことである。これができれば、もう食物は腹へ納めたも同然である。あとは、水素の噴射によるスピードで、先に落ちた獲物を追越し、下で大口を開けて待っていればいいのだ。クラゲから離れたらさいご、獲物はまっすぐ落ちてゆくことしかできなくなるからだ。いくら行く手に「地獄の大口」が待っていてもである。

獲物を振り落とすことは、むずかしくはないだろう。尾を離している時、あるいは、握力のゆるんでいる時はいくらでもあるはずだ。

しかし、今度の場合三人だったので、単純にはゆかなかった。一度に落としてしまったら、獲物を二人も無駄にすることになる。キャッチできるのは一人だけで、残る二人はみすみす地上へ落としてしまうことになるからだ

だからクラゲは、彼らを一人一人落としたかったのだ。もしブラックが決意して落ちる体勢になっていたら、二人に尾を強く握るよう指示したはずだ。そしてブラックが落ちる瞬間、急ぎよ、助けにゆくと称して身をひるがえし急降下する。

あのとき、バードが尾に掴まりブラックを捕らえておかなければ、クラゲはユミを放っておいたろう。一人しか得られない状況なら、クラゲは迷うことなくブラックを選んだはずだ。

ブラックにはユミのような気丈なものはなく、恐慌状態に陥り、難を逃れることはできなかったろう。たとえ、バードにユミと同じ指示を受けていてもである。

「おーい」

ブラックが、小走りに近寄って来た。

「おい、あれは本気だったんじゃないやあるまいな。あれだよ」

なにかと思えば、クラゲの上で、バードがユミに唇をせまった芝居のことだ。

「あのときは、未遂だったよな。まさか……」

「ああ、ちゃんとキスしたよ。なにしろクラゲを騙すのには、半端じゃだめだったもの。ねえ」

ユミが真顔で言う。

「なに！」

ブラックは本気だ。

「嘘だよ。その前にユミはとび降りちまった。惜しかったな」

たちまちブラックの表情がやわらぐ。

「だよなあ」

「待ちましたか？ 決心は変わりませんね。結構」

ロボットは、いろいろ持っている。二メートルほどの、棒状のもの。くすんだ銀色の、箱のようなもの。

だが、突き出したのは、それらではなかった。

「まず、これを食べて下さい」

褐色の果物だ。バードは受け取り、皮を剥く。

「これを、以前にも見たことがありますか？ 町には、ありませんね。[グリコン・フルーツ]というものです」

噛み付く。なにかを、思い出すようだ。苦味のある甘さ。バードは、柔らかいそれをたちまち食べてしまった。

「次にこれです」

と他のものを地面へ置き、箱を持ち換える。縁がやや潰れたそれは、何本かのベルトが付いている。そのベルトを片手でまとめて持ち、箱を自分から離すにした。

「いいですか。少し離れて」

と言って、箱の端のなにかを操作した。

度胆を抜かれた。ザワザワという音とともに、たちまち箱の両脇に、白っぽい何メートルもあるものが出現したのである。

すぐ、それは翼らしいとわかった。巨大なグレーの翼が、この箱の中に納められていたのだ。「これを使えば、あなたは自由に空を飛ぶことができます。これが、あなたの特殊能力なのです、バード」

ロボットが再びなにか操作すると、今度は嘘のように巨大な翼が箱の中へもぐり込んでしまった。

「便利でしょう。この翼は、[形状記憶物質]で造られています。スイッチにより、箱の中の装置が専用の電気信号を発生させると、翼になったり、逆に不定形の物質に変わり、箱の中へ納まります」

物質が、自分のとるべき形を記憶していて、信号を受けるとただちに翼を形作るのだという。電源は、箱自体が光電池になっていて、これが日中吸収する太陽エネルギーによって確保されるという。

「むろん、この翼を出したり引っ込めたりするための、エネルギーのことですよ。飛ぶために翼を動かすのは、あなたの筋肉の力によらなければならないのです」

バードが手を出そうとすると、

「待って、少し説明いたします。これはあなたのもので、逃げ出したりしませんから」

ロボットが始めた。まず、羽ばたきによって空中へ舞い上がるということは、いかなる高性能の翼を使ったとしても、人間にとっては不可能に近い。それがバードのように上体の筋肉が異常に発達した者となると、可能性が見えてくる。

「しかしです、空中へ舞い上がるための運動はきつ過ぎて、たちまち疲労物質がたまって動けなくなってしまうでしょう。ところがです」

バードの筋肉は、ただ発達がいいだけではなく、特殊な能力を持っているのだという。通常の

筋肉と違って、疲労物質がたまりにくいのだと言った。

「よ、よくそんなことがわかるな。俺は、そんなこと全然知らなかったぞ」

この惑星上のことで、神の知らぬ事はない、とロボットは言う。

「ですが、その能力は、あなたの体だけでは発揮できないのです。通常、食物を摂っていたのでは、だめです。今の、グリコン・フルーツが不可欠なのです」

グリコンに含まれているある物質と、バードの体に存在する特殊酵素の反応によって、疲労物質を消し去るのだという。グリコンの効果は迅速であり、口内にあるうちにすでに一部は吸収されるほどだという。速やかに血液中に入り、筋肉へ行き渡る。

「当然、このフルーツには、通常の果糖や蛋白質などの栄養素も含まれています。また、これは、外の世界では決して珍しい植物ではありません。あなたにとって、好都合ですね」

バードは今食べたものが、幼い頃老教師に貰った果物と同じだと確信した。

期待と不安にどきどきしながら、バードはロボットにその装置を背負わせてもらった。両肩へ掛けたベルトを、腹の横にまわしたベルトに留める。

スイッチは、右側にある。オン。たちまち巨大な翼が生える。重さは、負担には感じられない。翼に付いている把手を握る。

「羽ばたいて、鳥のように。それが、あなたの本来の姿と言っているのです」

我ながら、すばらしい運動量だ。おっ浮く。自らの羽ばたきで、バードは今浮上を始めた。

そう、あの時一幼児の時は、高いところから降りただけであった。落下速度を羽ばたきによって落とし、なんとか無事に着地しただけであった。だが今は、地上から飛び上がるという完全なものだ。

すばらしい。高度一〇メートル。

「いろいろ試して下さい。あなたには、飛ぶ本能があります。自身をもって！」

ロボットが叫ぶ。

バードは夢中になった。自分は鳥になった。すばらしい。

町を見下ろす。あんなところで、惨めな暮らしをしていたのだ。その自分が今は翼を得、見下ろすことができる。

「バード！ あまり町の方へ行かないで！ 騒ぎになりますから」

バードは、町中を飛び回り優良人たちを見返してやりたかった。そんな気持ちが、猛烈に突き上がってきた。

「やめなさい、バード！ エネルギーが尽きますよ。さあ、もう降りて。旅が、これから始まるんですよ」

そう、これからののだ。まだ浮かれている時ではない。バードは降下した。着地は、まだ不安定だ。

「おめでとう。今日は、あなたにとってすばらしい日ですね。しかしまた、困難な旅が始まる日でもあるのですよ。気を引き締めて下さい。次は、武器です。手槍にしました。いいでしょう？」

強度は保障すると言う。綱が一〇メートルほどのものが付いているので、便利だ。飛びながら器用な足で槍を投げ、必要なら手繰り寄せることもできる。綱は細いので、嵩張らない。

バードは飛び上がり、足で空中から槍を投げる練習を始めた。投げ下ろすには、たいして力はいらない。そうではない投げ方は、まだ十分には力を入れられないだろう。練習するしかない。

彼は、近くに四、五メートル幹が残っている枯れ木を見付け、ほんのわずか体を浮かせた状態で、練習を始めた。器用な足といっても、物を投げることはしたことがないので、後で筋肉痛が出るかもしれない。

やがて、ロボットが声をかけた。

「いいでしょう。あなたには十分な筋力がありますから、慣れれば問題はありません。最後に」

と言って、なにか履物らしいものを地面へ置いた。サンダル的一种か？ 褐色の、数本のバン

ドが付いたもの。

「特製です。強度は十分あります。特別なのは」

バードの特殊な足なら、ワンタッチで脱ぐことができるという。素早く飛び立つ時、サンダルを放り出すように脱げるわけだ。

「では、ご成功を祈ります。間もなく同行者が二人やってくるはずですから、ここでお待ちください」

ロボットは用が済むと、あっさり去っていった。

今度は、普通の投げ方を練習しようと思った。翼のボックスを降ろし、槍の綱を外す。さきほどの枯れ木を、狙う。全身を使って投げる。だめだ。少し手前に落ちた。歩き出そうとして、飛んでいったら、と気づく。翼は降ろしてある。

いや、ロボットは別れる時、エネルギーが切れないよう気をつけろと言った。いつも、グリコン・フルーツを確保しておけと。しかるに今、あたりを見回しても、それは見当たらないのだ。葉が楕円で、あの果実が房状にぶら下がっている、と言った。グリコンの木は、本当にすぐわかるのだろうか。

や？ バードは槍を拾って戻ってきた時、誰かが近づいて来るのに気づいた。背が、高いらしい。翼のボックスを、急いで背負った。大事なものだ。すぐ逃げねばならない場合もある。

槍について、近づいてくる者を待つ。女だ。たいへんな、のっぼだ。

ブーツに、たいして腿が隠せていない、赤いキュロット。やはりなにか、長い物を担い

でいる。槍では、ないようだ。

「あんた、道連れ？」

バードを見下ろしている。おそろしく脚が長いのだ。

顔はわるくないが、気が強そうだ。黒い髪をポニーテールにしている。

二人が会話する間もなく、三人目が来た。真っ黒な奴だ。

「おーい、待ってくれー」

そいつは、黒い鎧で身を固めているらしいのだ。少しも、体を露出させていない。おそろしく、用心深い奴なのだ。

胸部は、二つに分かれている。頑丈そうな材質だ。その下の腹部は、蛇腹になっている。可動性は十分だろう。

頭部は、一〇センチほどの二本の曲がった角を付けた、ヘルメットだ。マスクの出来がすばらしい。人の顔を、黒い物質で精確に作り上げてある。しかも、しゃべる時、口や顎がはなはだスムーズに動くのである。

「あたいは、ユミだ。あんたは？」

と女

がバードに聞いた。彼は答えた。

「バード？　なんでバード（鳥）なの」

「俺は、ブラック。わかるだろう？　説明しなくても」

黒い奴が口を出す。女はそれを無視して、

「ロボットの奴の餞別だ」

と自慢気に、片方の脚を突き出した。長い脚の膝まである、薄青色のブーツである。

「あたいの足に、ぴったりだ。蒸れないし、柔軟なのに絶対壊れないってことだ。なにしろ、あたいのハードな運動に耐えねばならないんで、十分強く作ってあるらしい。長い旅だしね」

女は町で、優良人を相手に武芸のインストラクターをつとめたり、自身各種スポーツの競技者でもあったと言った。バードは自分の生活以外なにも知らなかったから、このユミという女の存在など知らなかった。しかし、そんな女が、なぜこの旅に出るんだ？　町で華々しく活躍していた者が。

「俺なんか、なにも貰えなかったぞ。武器以外と言え、このベルト一本だ。不公平じゃないか」

と言ったが、黒い奴はニヤリとして、

「もっとも、俺の場合、たいして付け加えるものがないんだな。わかるだろう？」

「ふん」

女は横を向いた。勝手にしろ、という顔だ。

「で……バード？　おまえは、どうだ。その槍と……」

ユミも、バードを上から下まで見回した。そして、彼女はふと笑った。

「なに、それ、サンダル？　もっと気の利いたものなかったの。自前？」

これは、とバードはひとしきり自慢話を打とうとしたが、

「なにを背負っているんだ。バックパックじゃないな」

黒い奴が、バードの後ろへ回った。バードは自分で、衣類等を入れた頭陀袋を持ってきている

。女は、リュックを背負っている。黒人の荷物は、武器の鎖鎌だけだ。

「あれ？ なにこれ、へんな箱」

バードが二人を自分から離れさせ、スイッチを入れた。

「ひえーっ、これは、たいしたもんだ。なかなか良くできてる。ロボットの奴、おまえには、こんなに手のこんだものをくれたのか」

二人共、あっという間に出現した巨大な翼に、度胆を抜かれた。

「で、飛べるの？ 本当に」

「おお、飛んで見せろ。おもちゃじゃないんだろうな」

バードは自信満々で、羽ばたき始めた。が、力が思うようにならない

それでもなんとか、数メートル上がった。そしてすぐパワーをゆるめ、降下した。

「なんだ、もっと飛べよ。けちるな」

「そうじゃないんだ」

バードはスイッチを入れ、翼を収納してしまった。

今腹ぺこでもあるし、まだ習いたてで、良く飛べないのだ、と言い訳した。空腹と聞くと、すぐ黒人は反応した。

「おい、この辺には、草もろくにないな。これじゃあ、腹が減ってもどうにもならない」「あんた、草を食べるの？」

黒人は言った。自分はあらゆる植物を食物にすることができるのだ、と。しかも、それらを十分栄養とできるという。バードは呆れた。こいつは、牛か。

「へえー、それはそうとして」

女は、聞きたくもないというように、話を変えた。

「あんた、ずいぶん物々しいじゃん。その格好で、ずっと通すつもり？ 重くないの」

バードも言った。

「おい、せめて顔ぐらい見せろ。最初の挨拶じゃないか」

黒い奴が怒った。

「なに言ってやがる。俺は、なに一つ身に着けているもんか。ふざけるんじゃない！」

二人は顔を見合わせた。

そして次の一瞬には、のっぽの女が吹き出した。

「ハハハハ、フフフフ、ヒヒヒヒ」

腹を抱えている。

二人の男は、笑い暴れる女を唾然と見ていた。今にも、転げ回りそうなのだ。

「で、ほんと。フフフ、それ全部あんたの体？ 皮膚？ ヒヒヒ」

苦しそうである。足を踏みならしている。

黒人も、気が抜けたようである。あまりのことに、怒りも薄れてしまったらしい。

「わ、わるいか？」

「フフフ、よくやるよ。ここまでとは、思わないもの。いくらバイオテクノロジーに凝ったからって、ヒヒ」

驚いたことに、黒人は鎧を着ているのではなく、硬い殻で全身が覆われていたのだ。たとえば、亀の甲羅とか、海老、蟹などの甲殻類の外骨格のようなもので、だ。遺伝子操作により、人体の外皮を甲羅に変えてしまったのだ。

「俺が知るか。好き好んでこんな体になったんじゃないやい。生まれたら、こうだったんだ」

バードも、気の毒になった。だからこそ、この旅に出るんじゃないか。この女は、ひど過ぎる。

「おまえだって、その体が不満なんだろう。そんなに高いところに顔があったんじゃないやあ、話をするにも困るだろう」

「なに！」

形相が変わった。

「それは、おまえがチビだからだよ。下の方で、つべこべ言うんじゃないよ」

「なに！ チビだあ？」

バードは気に障った。

「おまえが、のっぼ過ぎるんだ。馬鹿長いその脚は、なんだ。無駄にもほどがある。ちゃんとした（長さの）スカートをはかせようと思ったら、大金がかかる」

「うるさいんだよ。誰がスカートをつくってくれって言った。なんでおまえが、そんなこと心配するんだよ。なんだい、嫌らしい。人のこの、エレガントな、あんよを、チラチラ見やがって。蹴り飛ばすよ」

「な、なに、蹴るだあ？ おう、やって貰おうじゃねえか。もつれて転んで、尻でも出すな」

「この野郎！ 誰が！」

あっという間に、バードは引っ繰り返った。顔全体が、つぶれたような感じだ。

「ざまあ、ごらん。ハハハ、あたいのブーツの味は、どうだい」

「こ、こいつ」

黒人が、バードを立たせた。バードの顔に、ブーツの底の跡が付いている。最高速の前蹴りを食ったのだ。

「こいつ、どうするか見てろ！」

バードが槍を構えた。

「まあ、まあ、大人げない。相手は女じゃないか」

黒人は、バードの顔のブーツ跡に笑いをかみ殺しながら、押し止めた。

女は、上から覗き込むようにして、

「なあんだい。いくらでも相手をしてやるよ。チャンバラは、あたいの専門だ。もっとも、それ以上脚を短く切り詰めちゃあ、罪かな」

「な、なに！」

「まあ、まあ、あんたも少しは自重して」

黒人が、女をたしなめる。

「ふん！」

女が、さっさと歩きだした。

バードは、まだ憤怒の形相がすさまじい。

女は長いコンパスで、ぐんぐん離れていく。

黒人は二人を見比べていたが、

「俺たちも、行こうか。こうしていても、しかたない」

「誰が、あんなアマ」

のっぼ女は、遠くなった。

「旅をやめるのか？ 望みを捨てるのか。俺は行くぞ。女一人にこだわって、一生一度のチャンスを手放すのか」

黒人も歩きだした。

バードは、黒人の後ろ姿を見ているうち、次第に怒りが静まってきた。そうそう、やつらは、俺の真の能力を知らないじゃないか。このまま別れて、一生笑い者にされてたまるか。今に俺の実力を見せてやる。

バードは、二人の後を追いつめた。なに、旅は長い。十分挽回してやれる。嘗められてたまるか。やつらには、どう力んだって飛ぶことはできないんだ。

お、そうか。飛んで、あの、のっぼを追い越してやるか。驚くぞ。

だめだ。果物がない。もう、いくらも体にエネルギーが残っていないだろう。ロボットの奴、グリコンという果物は、この世界のどこにでも実っていると聞いていたが、まだ全然見てないぞ。本当だろうな。

森が見えた。やっと、町の外の荒廃した地帯が終わったのだ。

ユミは、思わず頬がゆるんだ。森の中には、きつとなにか、小動物なり鳥なりがいるだろう。

久しぶりに、美味しいものが食べられる。この旅へ出た理由の一つは、これだったのだ。町のよ
うに、自由のない、限られた食物しかないところでは、生きた心地がしない。優良人たちの国で
ある町などに、いつまで閉じこめられていてたまるか。

「おっ、かっこいいねえちゃんだぞ。これは、これは」

はっと気づいた時には、数人の異様な風体の者共に囲まれていた。森に潜んでいたのだ。
変異人だ。様々な体形の者たちだ。女もいる。巨体だ。

どうやら首領らしいのは、背の高い、顔になにか青いものを被っている男らしい。

「待て、まだ他にも後から来る奴がいるぞ。様子を見るんだ。女、騒ぐんじゃないぞ。命が

惜しかったらな」

「なに、おまえらなんか、指図される覚えはないよ。どかないと、真っ二つだよ。あたいは、気が短いんだ」

ユミは鞘を放り出すと、ナギナタを一振りした。キラキラ光る刀身だ。

「ほほう。これは元気なねえちゃんだ。ますます気に入った。野郎共、怪我をさせないようにするんだぞ」

「なんだよ、あんた。こんなひよろ長いのに夢中になって。あたしという者がありながら」

巨体の女だ。大きなクリーム色の布を、体に巻き付けている、といった服装である。太い腕が、むき出しだ。

ユミが笑った。

「あんたたち、そういう関係なの。フフ」

男の方は、心なしか極まり悪げだ。

「なんだよ！ 悪いか、のつぽ」

「だって、そんな。ホホホ」

巨体の女は、すごい顔になった。

「あんたも、変異人なんだろう。それとも、ただのデブ？ うーん……」

ユミは思案顔になった。

「……いくら女が少ないからといって……あ、ひよっとして、あれじゃない？ あれあれ、あの時すごいんじゃない？ あんたは、太っているだけじゃなくて、あそこが特製なのよ」

その点で変異人なのだ。凶星だろうと言った。

巨女は、真っ赤になった。

「殺してやる。あんた、この女はだめだよ。あたしか、こいつか、どっちかに決めておくれ」

こいつを取

るのなら、自分を殺してからにしてくれと言った。この大女を殺すためには、何人の男の命が失われるか。

男は、あわてた。

「おい、おい、ユリカ。そんなに向きにならなくても……そうだ。他の連中にだって、女は必要じゃないか。この女は、みんなのものにすればいいんだ」

巨女は男を睨んだ。信じていない目だ。

「そんなこと言って、自分が一番使うんだろう。きたない。今まで、あんなに夢中になっていながら。あたしの虜になっていたじゃないか」

男が巨女の口を塞ごうとして、女の腕に突き飛ばされた。

ユミはもだえながら、吹き出すのをこらえている。

「なんだ、なんだ。おまえら。女一人に、寄ってたかって」

ブラックが、追いついた。一瞬みな目を見張ったが、すぐ、

「やれ！」

頭の声と同時に、ブラック目掛けて、ナイフが飛んできた。

「チャリン」

ブラックの肩をかすめて、ナイフは落ちた。

「ワッハッハー、やめろ、やめろ、無駄だ。俺をなんだと思っている。無敵の〔黒騎士〕様だぞ。刃物など効くものか」

左右から、手下が襲いかかった。手足の長いのと、首が、胴と大差ない太さの者だ。長い腕をブラックの首にからませ、太首は、得意らしい頭突きで来た。

「あいたたたた」

ブラックの胸に額を打ちあてた奴は、頭を抱えて座り込んだ。一方、首を絞めにかかった者は、ブラックに振り回され数メートル吹っ飛んだ。一人は頭を抱えたまま、他方は、ひどく腰を打ったらしく、体を海老のように曲げたまま動かない。

「だから言ったろう。今度は、打ち身じゃ済まないぜ」

と鎌を振って見せる。

「あたしが、相手だ。ただし、武器は、なしだよ。女を相手に、鎌を振り回す気かい」

ブラックはニヤリとすると、鎖鎌を捨てた。

「いいとも。一度、女と取っ組み合いをしてみたかったんだ。あんたなら、気兼ねなく闘えそうだな」

ブラックに見劣りしない、大女である。筋力もありそうだ。ユミはああ言ったが、この女の特技は、性技だけではあるまい。体力も、特別性だろう。

「こい！」

二人は激突し、両腕を組み合った。

巨女が真っ赤になって、ブラックを絞め上げる。ブラックも、顔色は変えられないが、全力で闘っている。

一分、二分。二人は譲らず、組み合ったままである。みな、呆れたようにその勝負を見つめている。

「おおいー、どうしたあー、こいつらは、なんだー」

やっと、バードが追いついた。

賊共が、一斉にバードへ振り向いた。

「なんだ、こいつは。やはり、仲間か？」

ボスが、バードをじろじろ品定めする。ニヤリとして、

「行っちまえ。おまえなんかに、用はない。邪魔だ、邪魔だ」

バードは青くなった。

「なに、どうしてだ。この二人は、俺の連れだ。どうして、俺だけ行っちまわねばならないんだ」

ボスが、せせら笑った。

「馬鹿な奴だなあ。せつかくこっちが情けをかけてやれば、いい気になって。おまえのような奴は、なんの足しにもならないから、構っちゃられないんだよ」

「わあー、もうだめだ。腹減った」

ブラックである。組み合ったまま、座り込んでしまった。巨女がその上になり、推しつぶされた形である。

「なんだい、こいつ。男のくせに」

巨女

は一つブラックを蹴ると、離れた。

「おう、おまえは、やはりすごい。口ほどにもない奴だったな」

ボスは巨女の腕にさわろうとして、また突き飛ばされた。がニヤニヤして、

「おまえという女は、なにものにも替えがたいな。万一、一時的につまらない女と関わることがあったとしても、それは気の迷いというものだ。結局はおまえという女に帰っていくに違いない」

巨女は、そっぽを向いている。

「さて、口だけの邪魔者は片付いたから、今度はねえちゃんに係るとするか。みんなにも、慰安が必要だからな。楽しみを持たなくては、団体生活はうまくいかない」

二本の長い棒が、ユミを襲った。が次の瞬間、棒は見事に四本にされた。

賊たちは、ナギナタの切れ味とユミの腕に目を剥いた。

「女同士で、勝負を決めようか。あたいは、ちゃんと武器を使うけど」

男たちが怯んだのを見て、ユミが巨女に笑いかけた。

さすがの力自慢も、ユミの刀術と、得物の切れ味に後退りした。

「わかったかい。なら行くよ。役立たず、さっさと起きるんだよ。呆れた奴だ」

とナギナタを下げ、ブラックに近づこうとした時、

「あっ、なんだよ！ こいつ」

ユミは驚いて、転びそうになった。足元に、なにか出現したのである。ユミの腰までしか

ない奴だ。

その隙を、ボスは逃さなかった。素早くユミのナギナタに手をかけ、握力のゆるんでいたのを好都合に、それを奪い取った。

さらにチームワークが発揮された。ユミは二人の男に、片方ずつ腕を押さえ付けられてしまった。彼女は脚のパワーで、二人を跳ねとばそうとした。

「脚が強いぞ。脚を縛れ」

ボスの命令で巨女も加わり、ユミは両足をそろえて結かれてしまった。これでは、両足をそろえたままジャンプするしかできない。

すぐ、腕にも縄がかけられた。

「ちくしょう。なんてやつらだ！」

「へへへ。ボス、おいらが、一番手柄ですね。たっぷりとお裾分けに与りたいもんで」

ユミはギョツとした。例のチビだ。ニヤニヤしながら、仲間の作業を見ていたのだ。この半端者のために、彼女は捕われてしまったのだ。思わぬ者の出現に隙ができ、不覚をとった。

「おまえがか？ まあ、匂いぐらい嗅げるだろう。ちょうどいい高さじゃないか。ハハ」 チビは、泣き顔をした。

「ボス、じゃあ褒美に、こいつを女の清掃係にしてやって下さい。俺たちが使用した跡を、きれいにさせるんです。口でね」

首の太い奴だ。頭は治ったのか。

「うん、そいつは、なかなかいいアイデアだ」

バードは、行動が遅れたことを後悔した。大勢の敵に、気後れしてしまったのである。槍を構えようとしたが、すぐ、それよりもスイッチを入れた。たちまち巨大な翼が、体の両側に出現する。

「や、なんだ、これは！」

賊たちは、度胆を抜かれた。

この隙に、とバードは羽ばたき始めた。大勢が相手では、空中からででも闘わねば勝負にならない。

しかし、思うような羽ばたきができない。力が入らないのだ。なんてことだ。全力を出しても、地面から二、三メートル浮かぶのがやっとである。すぐ高度が下がってしまう。驚いていた者たちも、やがて笑いだした。

「なんだ、なんだ。御大層なものを持ち出したと思ったら。その様は。ハハハハ」

みな、大笑いになった。

ボスが、これではな、とユミを見る。彼女は、そっぽを向いた。そして、

「そいつは、いかれてんだよ」

「うん？ ははあ、なるほど。そうか、でなければな」

ボスは納得顔だ。

やがてバードは、必死になって羽ばたこうとしているのを、子分たちに捕らえられてしまった。

翼を、ボスがバードから外した。

「ふむ。しかし、良くできている。気違いの持ち物にしては、上等過ぎる。誰か試してみろ」
筋肉の発達した、最も体のバランスのいい者が、翼を背負った。

「へへ、悪くないな。天使になった気分だ」

だが、羽ばたいても、体は全然浮かない。ボスは、がっかりした顔だ。大きな戦力を得られるかと思ったのに、だめだったのだ。

「やはり、気違いのおもちゃか。よくこうも、念の入ったものを作ったものだ。馬鹿馬鹿しい」
バードを、つくづく見る。

「そのベストは悪くないな。誰か着ろ。槍も、使えるだろう。まあ、戦利品は、十分あった

わけだ」

「こいつは、どうします？ 殺っちまいますか？ この槍で、始末してやりましょうか」 手足の長い奴が、ニヤリとして言った。

ボスは、ちょっと考えてから、

「まあ、そうあわてるな。献上品もあったことだし、命は助けてやろう。おお、その綱で縛り上げろ。それで、許してやろう」

と意味ありげに、ニヤリとする。

槍に付いていた綱が外された。バードは、なんとか助かったとほっとした。命さえあれば、なんとかなる。翼—どうしてだめだったのだ。

「へへ、ボス、それじゃあ、鳥葬ですね」

首の太いのが、笑う。

「チョウソウ？」

ユミが、不審な顔をした。

「おい、役立たず。今にどこからか、おまえの相手をしてくれる奴が来るはずだ。そいつは、普段は人の死肉ばかり食っているんだが、今日はどうかな。生きてはいても、身動きできない者がいたら、どうするかな。死ぬまで待っているか、それとも……だ」

このあたりには、[死肉漁り]というものがいる。人の死体の存在を嗅ぎ付けると、飛んできて、始末をするのだという。彼らの話からすると、変異人の一種か、それに近い存在らしい。始末するそいつが飛ぶので、鳥葬、と言ったのだろう。

バードは、恐慌を来した。生きたまま体を食われる。ユミを見ると、彼女は目を伏せた。なす術はないのだ。

「やめろ。こんな奴、放っておいても、害はない。俺が、おまえたちに力仕事をしてやるから、こいつの命を助けてやってくれ。腹さえ減っていなければ、俺は役立つぞ」

ブラックである。ありがたかった。

「そうか。おまえは助けてやろう。我々の牛馬の代わりとしよう。逆らえば、ユリカに仕置きをさせる」

だがこの、いかれたのは、ここへ放っておく。どうせ、大差あるまい。どこかで、同じ運命に遭うんだ、と言った。

バードは、念入りに縛り上げられた。両手は、後ろへ回して結かれた。足は、足首ではなく、膝の下を結かれた。足首では、手で解く可能性があるからだという。

「ちくしょう」

命を助けるどころか、念入りに結き、確実に[死肉漁り]の手に渡す気なのである。

賊共は、二人を引立てて森の中へ入っていく。ユミは結かれた足で、ピョンピョン跳びながらいく。ブラックは彼の鎖鎌から外した鎖で結かれ、大女に引き立てられている。

誰もいなくなった。身動きできず転がされている、バード一人。翼は、放り捨てられたままだ。狂人の玩具など、誰も持っていかない。

綱さえ解ければ、なんとかなる。翼を、もう一度試してみなければ。やはり、空腹以外原因は考えられない。ロボットに一つ貰っただけの果物では、たいしてもたなかったのだ。

その果物がなければ、どうにもならない。見渡しても、森の縁には、ロボットの言ったような木は見当たらない。グリコンは、この世界のどこにでも生育していると言ったのに。まず、綱を解かねば。そうだ、あいつらは、なにか得体の知れぬものが来るといったではないか。〔死肉漁り〕、それが身の自由を得ないうちに来てしまったらアウトだ。

バードに、笑みが浮かんだ。ワンタッチで、サンダルを脱ぐ。そうなのだ。彼には、足の指を自由に動かせる、という特技がある。あいつらは、それを計算に入れていなかった。手で解く可能性ばかり考えていたから、膝の下を縛った。逆に、今バードは足の方にある程度の自由がある

。

背をいっばいに反らしきつい体勢だが、なんとか足指が手首へ届く。うまい！ 結び目だ。こうなれば、器用な足なのだ。こんな時のための猿足なのだ。固い。しかし、これを解かねば明日はない。こんなところで、死んでたまるか。じいさん。そうだ。じいさんの心がこもったベストを奪われてしまった。今、バードは半裸だ。絶対、あのベストを取り返さねばならないのだ。

おお、ついに結び目にゆるみを感じられた。必死の努力の成果だ。これさえ解ければ、仕返ししてやれる。自由になったら、まず果物を探さねばならない。あれをたっぷり食えば、あいつらに目に物見せてやれるだろう。

結び目が解けかけた時、物音を感じた。上だ。しまった、と思った。もう、件の「死肉漁り」が現われたのである。

さて？ 綱を解くのは、様子を見てからにしよう。あわてても、そいつから逃れるには間に合わないかもしれない。とすれば、綱が解けそうもない、と思わせておいた方がいい。

来た。そいつは、バタバタ舞い降りてきた。

肩から翼が生えているらしい。バードと違って、翼は体の一部なのだ。

そいつは、用心深くあたりをうかがっている。臆病らしい。何しろ、死体でなければ食わないというのは、弱い生物だからだろう。

布らしいものを腰に巻いているだけの、裸だ。手足は細い。筋力は、弱いとみえる。そうなのか、とバードは思った。人体に翼という、本来ないものを付加するとなると、犠牲にしなければならぬものができてくるのだ。翼を動かす筋肉などで重くなる分、手足などを軽量化してあるのだ。でなければ、飛ぶには体が重くなりすぎるのだろう。

「へへへ、一人かい。まだ生きているな。どうかな、肉付きは。死んで、よく熟成した方が旨いんだが、そうも待てんな」

その痩せた奴は、うれしそうにバードの周りを飛び、品定めする。

「ふむ。柄は小さいが、なかなかの肉だ。これは、ラッキー、ラッキー」

そばへ来た。

「なかなかいいローズだ」

バードは恐怖した。そいつは黄色く汚れた長い歯を、バードの背の皮膚に立てようとしているのだ。

「やめてくれ！ あの翼をやるから」

そいつが、顔を上げた。バードは、背がひりひりする。傷ができたのか。

「あの翼が、どうだってんだ。上等の翼を持っている俺様が、あんなおもちゃをほしがると思ってるのか、馬鹿」

とりあえず、血抜きをしておくか。それから、レバーでも食っておこう。肉の方は後の楽しみだ、とほくほくしている。

「待ってくれ！」

食人鬼が腰から鋭い刃先のナイフを出すのを目にして、バードは悲鳴を挙げた。

「いい話を教える。それを聞いてからでも、いいだろう？ な、あわてることはないじゃないか」

せっかくの儲けを失うことになるぞ、とバードは言った。

そいつは笑った。

「まあいいだろう。が、いいかげんなことなら、すぐこれだからな」
と頸動脈を切るまねをした。

バードは必死だ。なんとか、こいつに信じさせねばならない。

「まずだ」

あの翼は役に立つ。そして、あんたに大量の肉をもたらすはずだ、と言った。

「肉？ 大量の？ どうしてだ。いいかげんなことを言うと、ひどいぞ」
ひどいものにも、どうせバードを食う気にいるくせに。

「本当だ。まあ聞いてくれ。それから、どうとでもしてくれ」

バードは説明した。この翼は、バードの仲間の持ち物である。その仲間は、山賊に襲われ、これで逃げようとしたが飛べず、彼らに掴まり連れていかれてしまった。仲間が飛べなかつたのは、実はあまりに空腹で力が出せなかったからだ。だが山賊たちは、仲間がいかれていて、これは役に立たない玩具なのだと決めてしまった。

それで？ と人食いは話に引き込まれてきた。

「そこで、あんたなら」

あん

たという飛ぶことの専門家が、実はこの翼は実用になる、たいへんな戦力になるはずだ、と山賊たちのところへ持ち込めば、彼らは信用するだろう。

「やつらにこれを売れ、というのか？ 馬鹿な、あいつらが代金を払うものか」

外の世界にも、なにか貨幣らしいものがあるのだろうか。特に、安定した価値を保障されたものが、あるとは思えない。とすれば、物々交換があるだけだろうか。

町では、人工クリスタルの小粒が、貨幣として使われていた。バードはそれを多少ベストのポケットに入れてきたが、ここでは無価値なのではないか。

変異人は、真面目に自分の仕事をしていれば、必要なだけのクリスタルを貰えた。しかし、優良人たちはどうも、なんの店でも、ろはだったらしい。彼らは、貨幣をもたなかったのか。

外のこの世界で生産されるのは、限られたものだけだろう。町からなんらかの経緯（たとえば略奪）で流れてきた品物は、たいへん貴重だろう。ここでは、必要なものは、力で手に入れねばならないのだ。バードの槍も、あの大切なベストも、鬨いに敗れたために奪われてしまった。力？ 今バードにそれはない。では、死か。違う。今、バードは、知恵にすべてを懸けるのだ。

それでいいのだ、とバードは言った。彼らに翼を奪われ、腹を立てて帰ってきていいのだ、と

。

相手が怒り出す前に、バードは続けた。

「腹を立てるのは、演技です。儲けた、と思わせておいた方がいい。やがて、誰かが、翼の能力を試すはずです。しかし」

「しかし？」

ナイフを下ろしたのを見て、バードはほっとした。調子も出てくる。そいつには、十分に翼を使いこなすことはできないはずだ。初めてでは、飛べたとしても高が知れる。

そこで仲間から離れて飛んでいる奴を、専門家のあんたが空中で襲う。相手は両手がふさがっているので、簡単にあんたのナイフでやられるだろう。たちまち地上へ落ちる。墜落では翼が壊れてしまうので、ほどほどの傷にした方がいい。翼は、また使える。

「なるほど、うまい話だ。だが、考えていたんだが、そのおまえの仲間は、どうしてやつらに連れていかれたんだ。気違いと思ったんだろう？ どうして、そんな者を連れていくんだ」

よた話で、人を馬鹿にする気か、とまたナイフを振り上げる。

「そんなことですか」

バードは、無理に落ち着いてみせる。

「実は、その仲間は女なんですよ。少しいかれてはいますが、一見チャーミングな女なんです」

そいつは、あつという表情をした。

「なるほど、それならわかった。女は貴重だからな」

外の世界では、女の数が少ないのだろうか。バードはたいした考えもなく言ったのだが、良い目に出た。あの山賊たちがユミに夢中になっていたのも、女には価値があるのだろうと思ったのだ。

ふん、これを使ってなあ、とそいつが翼の方へ行き皮算用を始めた時、バードは一気に綱を解いた。

「あ、貴様！」

そいつは、振り向くとすぐ飛んできた。バードは、そばにあったサンダルの片方を夢中で投げた。脚は、まだ自由ではない。

サンダルがうまく顔に当たり、そいつの振り出したナイフはバードから外れた。バードは死に物狂いで、そのナイフを持った腕を押さえ付ける。折ってやるという気でその腕をねじると、ナイフを落とした。

凶器さえなければ、こんな奴どうとでもなる、とバードは余裕をもった。思いついて、そいつの足を掴んだ。やたら翼をバタつかせるので、腕を捉えているのはたいへんなのだ。

そいつは、ナイフを落とすと急に弱気になったらしく、飛んで逃げようとした。しかし、バードは両手で、相手の両足をがっちり握り締めている。バードを下げては飛び立てないらしい。

「放しやがれ、こいつ！」

足を捉えているバードを殴り付けようとするが、バードは必死でしがみつく。拳が頭に当たることであっても、そいつの力ではたいして応えなかった。

やがて、そいつはグッタリして、飛び立つのを諦めた。

「どうしようってんだ。命が助かったんだから、もういいだろう。おまえを食うのを諦めたんだから」

なぜ、足を放さないかと言う。

バードは、自分の膝を束縛している綱を解け、と命じた。バードに足を捉えられたまま、そいつはしぶしぶ腰を折る。

「次に」

とバードは、やっと自由になった足を動かしながら、言った。グリコンという果物を知っているか、と。

「ああ、それがどうした」

珍しくもない植物だ、と言った。バードは、やっと顔がほころんだ。

「言う通りにすれば、解放してやる」

最も近いところにあるグリコンの木へ、案内しろ、と言った。

「すぐわかるよ。案内するまでもない」

しかし、バードは信じなかった。もし嘘だったら、取り返しがつかない。急ぐのだ。

相手に、横になるよう命じた。そして、足を相変わらず捉えたまま、自由になった自分の足で、そいつの両手を掴む。

「なんだ、この足は？ なにをやる！」

バードはそいつの手を足でガッチリ捉えると、今度は手を使い、そいつの足を綱で結び始めた。

「なにを、しやる！」

足を束縛した綱を握ると、バードは立ち上がった。

「さあ、行くんだ。グリコンのあるところへ」

そいつは、急いで飛び上がった。しかし、ぴんと綱が張り、バードの手とそいつの足は繋がっている。

そいつが、体を折り曲げて綱を解こうとすれば、羽ばたきを十分できずガクンと高度が下がってしまう。またバードも、綱を引いて牽制する。

「無駄だ、無駄だ。諦めて言うことを聞け」

バードは笑っていた。やっと果物が手に入る。

ようやく、そいつも諦めた。

歩き始めてから、バードは気づいた。そして、待てと止めた。翼を忘れてどうする。

そいつを引っ張りながら、翼へ向かって移動した。

「ちえっ。それは、おまえのものなんだろう。騙しやがって

そいつは、しきりに悔しがった。が、スイッチ一つで、あっという間に翼が引っ込むと、目を丸くした。

「えらく便利なものだなあ。おまえが作ったのか？ 見掛けによらないな」

バードがなににも教えないので、今度は弁解を始めた。自分はなににも、好き好んで死肉を食うわけではない。が、なにしろ、生れ付き肉食するようにできている。また、死体は誰かが処理せねばならない。だから、自分がきれいに平らげてしまうのは、はなはだ合理的なのだと言う。

バードは、知ったことかと思った。こいつは、生きているバードを食おうとしたではないか。

「へんなまねは、するな」

バードが綱を、一回二回と引く。

「やめろ。ちゃんと連れていくから」

足を引かれる度に、そいつの翼の動きが乱れる。

すぐバードも、そいつの速度に合わせて、走り始めた。

そいつは、森の縁に沿って飛んでいく。なるほど、森の中へはいってしまっただけでバードが付いていけない。そうなれば、バードが綱を引き寄せることになるから、そいつにはなんの得にもならないわけだ。

森の縁でも、グリコンの木はあるのだろうか。が、不安はすぐ消えた。

「あったぞ！ もうすぐだ」

なるほど、なにか果実らしいものを付けた木が見える。大きな丸い葉だ。

「これだ。もういいだろう。放してくれよ」

バードは空中にいる奴に、果実を投げてよこすよう命じた。

「へんなまねをすれば、引き降ろすぞ」

大人しく、一つ放ってよこした。たしかに、これだ。バードは、皮の上からかぶりつく。気のせいか、たちまち力が湧くようだ。

「これだ、これだ。できるだけ持って、降りて来い。そうすれば、綱を解いてやる」

やれやれといった様子で、そいつは果実を集め始めた。バードは、顔がゆるんでいる。ここは、なんていい世界なんだ。

間もなく、[紐付き]が胸いっぱい抱えて降りてきた。

「よくやった。約束は守る」

だが、バードはあわててそいつから少し離れた。うっかりしていた。奴の綱を馬鹿正直に解いていて、頭を上からガンとやられるところだった。今度こそ、本当に餌になってしまう。非力な奴でも、こっちが予期しない時に全力を出したら、致命的ダメージを与えられるだろう。

「自分で解け。これで、解放してやる」

そいつはニツと笑った。汚い長い歯だ。

綱の端は、ちゃんと握っている。なにしろ、これが今残っている唯一の武器らしいものなのだ。持っていかれては困る。

そいつはてきぱき行動し、あっという間に飛び立って行った。バードはこれから、空からの襲撃があることを心得ておかねばならない。あいつが根に持って、彼を付け狙わぬともかぎらないからだ。

一人になり、果実を食べながら考えた。あいつらをとっちめるには、どうしたらいいか。飛ぶことはできても、武器がない。綱で、投げ縄攻撃はできるが、相手は六、七人なのだ。

十分に食べると、バードは翼を試してみた。うまい。今度は、なんのこともなく空中へ舞い上がった。やはり原因は、果物の欠乏だったのだ。

まず、あの場所へ戻った。彼らは森の中へ入っていったが、空からでは、森の中

ないだろう。

ブラックだ。黒い体が、木々の間から現われた。

よく逃げられたものだと一安心し、ブラックの前に降り立つ。

「あっ、おまえ、飛べるんだな。驚いた。これはいい」

「それより、おまえこそ、よく逃げられたな」

実は、とブラックが話し始めた。

二人は、森の中にある、樹木が切り払われた場所へ連れていかれた。彼らはそこで、酒宴を始めた。奴隷を得た祝い、である。

ブラックも、付近にある草を食べることを許され、どんどん詰込み始めた。鎖を引く巨女が、目を剥くほどである。仕上げは、大量の排便だ。これには、みな呆れた。怒った。彼らは結果を考える余裕もなく、ブラックを追い払ったのである。

バードも呆れた。こいつはまるで、巨大な青虫ではないか。蝶などの幼虫が、野菜を食荒らし、おそろしく派手に便を撒き散らしてあることがある。バードは、その場面を思い浮かべた。この黒い奴のやったことは、その超拡大版なのだ。

おそらく、ブラックには、あらゆる植物を栄養とできる長所がある反面、その吸収率は低いのだろう。それで、排泄物が大量なのだ。

しかしそのお陰で、大きな戦力が戻ってきたわけである。腹拵えのできた装甲車は、頼りになるだろう。

「で、そこは、樹木がないんだな。では、空中からでもわかるし、降りられる。うまいぞ」

二人は手筈を整えた。ブラックが賊共を牽制している隙に、バードが空中からボスを襲う。ブラックの相手は、また巨女になるだろう。後は、成り行きに任せるしかない。

「今度は大丈夫だ。腹さえ足りていれば、女なんかに負けるわけがない」

それを信じるしかなかった。ユミのことが、心配だ。いくら気丈な女でも、男たちに弄ばれてはどうなるかわからない。

バードは、空き地の上空にいた。どうやら、宴はまだ続いているらしい。

ユミはと見れば、ボスの隣で、なにか骨付きの肉らしいものをかじっている。片手は自由らしい。手下たちの芸でも見ているようだ。案外、食物に有り付いてほくほくしているのではないのか。バードたちがこなければ、ずっと男共の慰み者で暮らさねばならないというのに。

投げ縄、うまく使わねばならない。あのボスの首を、確実に捉えるのだ。まさか上から襲われるとは思っていないだろうから、焦らず確実にやることだ。

ブラックが、空き地に姿を現わした。

なにか丸太のようなものを、宴の真ん中へ投げた。焚火が散らばり、賊共が叫びを上げた。

「や、また来やがった。よしユリカ、やっつけろ。今度は容赦するな！」

巨女が立ち上がり、ブラックの方へ行く。

ブラックは心なしか怯んだようだが、

「前のようにはいかんぞ。俺の本当の力を見せてやる。

たちまち、巨体がぶつかり合う。

バードは機はよしと見て、足に持った綱を確かめる。

ユミの隣で、巨女を激励しているボス。手下共も、すっかり二人の闘いに見入っている。思い切って投げた。

うまい！ 首が入った。全力で羽ばたき、高度を上げる。

「うぐっ、なんだ！ 誰か、手を貸せ……」

ボスが叫ぶ。手下共は、あわてふためく。

ユミが動いた。素早く両足で跳び、そばの手足の長い奴を突き倒し、ナギナタが立て掛けてあるところへ移動した。他の手下共は、空中のバードに気を取られていて、彼女に気づか

ない。

チビが気づいた時には、すでにユミはナギナタを手にしていた。

あまが、あまが、と叫ぶのに気づき、首の太いのが近づこうとすると、
「真っ二つだよ！」

ユミが威嚇すると、足が止まった。

ユミは素早く、ナギナタで足の縄を切った。

手足の長いのが、わきからユミに絡み付こうとする。それを感じたユミは、自由を得た瞬間ナギナタを振った。

「ギエツ」

腕が飛んだ。

首太が、突進する。

その前に、刃が振り下ろされる。

「ギャーツ」

首太が額を押さえた。

さらにユミは、そばへ来てなにか悪さをしようとしていたチビを蹴った。チビはラグビー・ボールのように飛んで、落ちた。

「どうだ。あたいを怒らすと、こうだよ」

チビは腰を打って、動けない。

一人は、腕を一本失った。

首太はヘッド・ストラップを切り落とされ、額に傷を負っている。

「骨には、届いていないはずだ。当分、頭突きはできないだろうけどね」

バードは、ボスを綱で引きずりながら、ユミの手並みを見ていた。さすが専門家だと。綱を付けたボスを、空中へ引き上げることもできる。しかし、その必要はなかった。相手の足が地に着くか着かないかぐらいで引きずっていれば、十分であった。後は、誰か手の空いた者が始末すればいいのだ。賊共は、頭の災難で右往左往するばかりである。

ボスは、すでにふらふらである。手で綱を緩めようとしても叶わず、綱は首を絞めつづけている。普通の人間だったら、もう死んでいるだろう。

実はボスは、青いものを被っていたのではなかったのである。彼もブラックのように、装甲になっていた。頭から顔までが、青い甲殻で覆われていたのである。

むろん、胴体は普通の肉体だ。だが、装甲の頭部との接続部である首は、必然的に両方の性質をもっていたのだ。すなわち首は、普通の体の部分よりある程度強度が高いのである。だから、綱で絞め上げられても、苦しんではいるが死には至らないのである。

「バード、もういいよ。こいつは、あたいが始末する」

ユミがボスの前に立ち、ナギナタを構えた。ボスは、恐れをなした。

「お、おい。まさか、殺す気じゃないだろう。な、な、落ち着いて」

バードは、羽ばたきを調節して空中停止をし、ボスが首を真っすぐたてる状態に綱を張っている。まさかユミが、ボスの首をバツサリやるとは思わないが、いかにもそうさせるという状態にしているわけだ。少しは懲らしめてやらねば。

「観念しな！」

言うが早いか、ナギナタがきらめいた。

「わっ」

とボスが手で首をかばう間もなく、刀身が移動した。

「あんた！」

巨女だ。ユミの奴まさか、とバードは思わず目をつぶった。

が、

「わっはっはー。意気地なし。さんざん勝手なことやっておいて。死ぬ覚悟ぐらいしておけって言うんだよ」

ユミは、ボスの首の数センチ手前で、刃を止めたのである。ひやひやさせる女だ。しかし腕はいい。

「やったー。勝ったぞ！ ざまあ見ろ」

ブラックだ。巨女が倒れている。投げ捨てられたのだ。

躍り上がり、二人の方へ走ってきた。バードも綱を放し、着地した。翼を納める。

「見たな。俺の勝ちだ。これが本当の力なんだ……」

二人は、ブラックに辟易する。巨女の方を見ると、ひどく落胆した様子で歩いてきた。ボスとは見れば、意思を喪失したように、さっきのままの姿勢でいる。まだ綱を首に巻き、両手が首を守る位置に挙げられている。

巨女がボスに近付き、綱を首から外した。ボスは相変わらず意思がない。それほど、ユミの一振りは恐怖感を与えたのだ。

バードは、自慢話の尽きることがないブラックを無視し、手下共の衣服を調べ始めた。ブラックの奴、巨女が敗戦のショックで虚脱したから、勝てたのかもしれないのに……

いた。あのベストだ。じいさんの贈り物。待て！」

そいつは、縮み上がった。あの時、バードの翼を試した奴だ。こいつはいったい、どんな点で変異人なのか。なんの能もないように見える。

そいつはバードの意思に気づき、あわててベストを脱いだ。

バードへ、捧げるように渡す。

「よし、行っちまえ。命は助けてやる」

そいつは、けつまずきながら、逃げ出した。他の手下共も、この空き地から出ていく様子だ。巨女が、ボスを抱くように歩いている。

おっと、槍。これは、放置してあった。どうせ取り戻されると思ったのだろう。

翼を降ろし、ベストを着る。

「やったね。うまくいきそうじゃないか、あたいたち」

ユミが近づいてきた。バードも笑顔になる。

「へえー。これ、ちゃんと使えたのか」

置いてあった翼のボックスを持ち上げる。

手がスイッチに触れ、翼が生きもののよう伸びだしてきた。